本実践・研究から見えてくること

研究協力者　細川和仁

（秋田大学教育文化学部こども発達・特別支援講座）

道徳科における教材と演劇的手法

まず，コロナ禍において難しい対応が迫られる中，オンデマンドでの授業公開，オンラインでの協議会を準備された附属小学校の教職員の皆さん，協議会参加の先生方に改めて敬意を表したい。

1．道徳科における教材

さて，先生方は道徳科においてどのように教材を選択しておられるだろうか。教師の専門職としての思考として，日常生活におけるあらゆる場面で出くわすあらゆるものの中で，これはあの学習の教材として使えるかもしれないと「ピンとくる」瞬間があるとされる（益子，2014）。また，そうした教材選択においては，学習者がどのようなつまずきを示すかにも焦点を当てられる。こうした教材選びは，教師の授業経験を基盤とする知識ベースに基づいている。では，道徳科の教材はどのように選択されるのか。また，どのような素材が教材になりうるのか。そして，子どもの思考過程をどれだけ想定できるだろうか。

本時で用いられた教材「友の命」について，個人的には，この教材から子どもたちが「友情・信頼」について考えるのはかなり距離があるのでは，と感じていた。自分の命を捧げてまで友人を救おうとする登場人物はあまりに現実と離れていて，お話としては面白いかもしれないが，そこから自分ごととして考えるのは難しい。正直者が「にくまれて」首を切られるなんてむちゃくちゃだし（後述の「デイモンとピシアス」を読んで少し見方が変わりました），妻や子どもがいる男の命と独り身の男の命を天秤にかけているような点も違和感がある。

2．道徳科と演劇的手法

授業者や子どもたちが，私と同じような距離を感じたかどうかはわからないが，こうした距離を埋める方法として，本時で用いられた「演劇的手法」が位置づけられると考える。附属小学校の道徳の授業においては，「あえてその立場に立って考えてみる」ということを重視してきたと理解しているが，そのための効果的手法であると言える。

本授業では，「ホットシーティング」（模擬インタビュー）と「葛藤のトンネル」という，演劇的手法が用いられた。既にここ数年の公開授業研究会においても，こうした手法が用いられており，あらためて，この演劇的手法が道徳の授業としてどのような効果をもたらすかが検証されたと言えよう。ちなみに，「葛藤のトンネル」については，京都府の小学校教諭が実践したものがもとになっており，その取り組みについては，渡辺・藤原（2020）を参照されたい。

この演劇的手法は，海外の学校教育において演劇がさかんに取り入れられていることからも，またこれまで蓄積された教師の実践知という面から見ても，効果が期待できる。あえてその役をやってみることによって，立場を変えて，時には自分や日常生活，現実を離れて考えることによって，ものごとを多面的に捉える思考力が育まれていく。様々な立場に立って役を演じることを通じて（そうした活動を一度通ることによって），その先に自己理解の深まりがあると考える。そうした省察につながっていくことが，道徳科の授業では目指されるべきだと考える。

3.「学びのものさし」と「心のものさし」

一方，附属小学校で取り組まれている現在の研究テーマに引きつけて，今回の授業について考えてみたい。学校の研究テーマは，教師と子どもで評価規準を定め共有するという，「学びのものさし」づくりである。「学びのものさし」は，学習状況や達成度を見極める評価規準と位置づけられている。今回の協議会の視点として，「ねらいとする道徳的価値の理解の幅を広げ，自分の納得する道徳的価値観を『心のものさし』として耕す姿につながっていったか」が掲げられていた。ここでの「心のものさし」は，道徳的価値の理解の幅を広げることによって，自分なりに納得できる道徳的価値観を獲得する，その価値観がそれぞれの児童なりの「心のものさし」になる，という意味に解釈できる。そうすると，ここでの「心のものさし」は道徳的価値観を指すものであり，「学びのものさし」は少し違ったところにあるのかもしれない。

では，道徳における「学びのものさし」はどのようなものが想定できるのか。例えば，道徳の学習を通じて多面的・多角的思考ができることを目指すとすれば，多面的・多角的思考をどの程度遂行できたかの評価規準が，道徳科における「学びのものさし」になるのではなかろうか。もちろん「心のものさし」を自分なりにつかむことも，「学びのものさし」の一部を構成すると考えられる。このような，道徳の学習を通じて身につけてもらいたい力に照らして，道徳科の「学びのものさし」が構成できるのではなかろうか。検討の材料としてこの場を借りて提案しておきたい。

4. ちなみに「デイモンとピシアス」について

今回の教材「友の命」は太宰治の「走れメロス」を想起させる。「走れメロス」をもとにして作られた道徳教材なのか，と調べてみると，国立国会図書館のアーカイブにおいて『村岡花子童話集』（金の星社）に収録されている「友のいのち」というお話を見つけることができた。なんと，1938 年の作である。「走れメロス」の初出が 1940 年なので，それよりも前ということになる。おそらく「友のいのち」も「走れメロス」も，古代ギリシアの二千年も前から伝えられている逸話がもとになっているのだろう。

『村岡花子童話集』からさらに 18 年前の 1920 年に，鈴木三重吉が雑誌『赤い鳥』に寄せた「デイモンとピシアス」というお話もあり，こちらは岩波文庫に収められている。これを読んで，あらためて道徳教材としての「友の命」を読むと，また違った見方ができるかもしれない。

（参考文献等）

- 益子典文，現職教師の教材開発過程の事例分析：素材の教材化過程における教育的内容知識に関する基礎的研究，『岐阜大学カリキュラム開発研究』31(1)，37-50，2014 年
- 渡辺貴裕・藤原由香里編『なってみる学び－演劇的手法で変わる授業と学校』時事通信社，2020 年
- 国立国会図書館デジタルコレクション『村岡花子童話集』（金の星社，1938 年）（2022 年 9 月 1 日閲覧）　URL　https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1169934/151?tocOpened=1
- 勝尾金弥編『鈴木三重吉童話集』岩波文庫，1996 年